平成26年に特に注意を要する病害虫

秋まき小麦の赤さび病

平成25年は、「きたほなみ」でも全道的に赤さび病の発生がみられました。
平成26年は、赤さび病の抵抗性に関係なく、越冬後の発生経過を観察しましょう。
止葉が抽出するまでに下葉に病斑が目立つ場合には、止葉抽出から穂ばらみ期に本病に対する薬剤散布を実施してください。

農業試験場の病害発生予察定点ほ場では25年秋の段階で「きたほなみ」に赤さび病の発生が確認されています

秋まき小麦のなまぐさ黒穂病

平成25年は、複数の地点でなまぐさ黒穂病の発生がみられました。
本病が発生すると、減収するだけではなく、異臭による品質低下を招きます。
発生の予防には健全種子を使用することが大切です。
また、発生ほ場では小麦の連作を避け、長期輪作を行ってください。
遅播きするほど発生しやすくなるので、は種適期を守ることも重要です。

発病した麦は稈が短くなる傾向にあります

病穂の内部には厚膜胞子が充満しています

春まき小麦のムギキモグリバエ

平成25年は、春まき小麦にムギキモグリバエによる被害が目立ちました。
平成24年秋の異常高温により越冬密度が高まり、翌25年春の低温による播種遅れにより被害が助長されたと考えられます。
春まき栽培では早期は種に努め、5月下旬以降6葉期頃まで茎葉散布を行いましょう。
初冬まき栽培でも被害が発生した地域では、5月下旬以降の茎葉散布を検討してください。

ムギキモグリバエにより白穂となった麦

らせん状の食痕

たまねぎおよびねぎのネギハモグリバエ

平成25年は、空知、石狩、上川地方のたまねぎ、上川、オホーツク地方のねぎでネギハモグリバエの被害が多発しました。
たまねぎでは、これまでも葉に本種による食痕が生じる場合があったものの、大きな被害にはなっていませんでした。しかし、空知地方のたまねぎではりん片にも本種が侵入して品質低下や腐敗球の原因にもなりました。
平成25年に本種が多発した理由は不明ですが、26年も発生に注意する必要があります。
薬剤防除にあたっては、幼虫による白い線状の食痕が増加する前、成虫による縦に並んだ白い点状の食痕が目立ってきたら防除を行うことが大切です。

ネギハモグリバエ成虫と白い点状の食痕

たまねぎりん片の被害

各種作物のヨトウガ

平成25年は、ヨトウガの発生量が平年より多くみられました。
通常、ヨトウガに対する防除が行われているてんさいやキャベツでは被害は少なかったものの、普段ヨトウガの被害がみられない作物で問題となりました。
道北地方では7月からデントコーンで、上川地方では8月下旬にそば、かぼちゃ、スイートコーンなどで被害が発生しましたが、薬剤散布が遅れたため十分な効果が得られませんでした。
ヨトウガの防除にあたっては、発生初期に薬剤散布を行う必要があります。
ほ場をよく観察し、発生を早期に把握し、すみやかに防除してください。

ヨトウガに食べ尽くされたそば

スイートコーンの被害

連絡先 Contact
中央農業試験場
病虫部 予察診断グループ
０１２３－８９－２００１
central-agri@hro.or.jp

平成25年度に新たに発生を認めた病害虫

25年度には新たに12病害と13虫害が報告されました

薬剤抵抗性個体群の出現

イネドロオイムシにイミダクロプリド（アドマイヤー）剤抵抗性の個体群がみつかりました

道内初発生の病害虫(16病害虫から6つを抜粋)

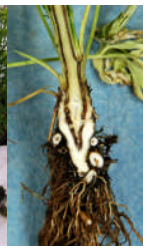
ブロッコリーのヒメダイコンバエ
幼虫が根を食害して生育不良となります

レタスのネギアザミウマ
結球部に対するアザミウマ類の被害ははじめてです

かぼちゃの果実腐敗細菌病
かぼちゃの果実に突起ができる症状の原因は細菌による病害でした（左：葉の症状、右：突起が生じた果実）

レタスの株枯病
茎の部分が黒く腐り、生育不良や結球不良となります
かびによる病害です

りんごのツマグロアオカスミカメ
幼果が吸汁されてコルク化します
早生ふじ品種で被害が多くなります



デルフィニウムの茎腐萎凋病
北海道では「シネンシス系」、青森県では「エラータム系」に発生しました

国内新発生の病害虫(6病害虫から3つを抜粋)

かぶの腐敗病
かぶの下葉のと根の頭部が腐る病気です。
細菌による病気です

こまつなの白斑病
こまつなの葉に白い斑点が生じて商品価値がなくなります
かびによる病気です

ふきのフキヒメクキモグリバエ
フキの葉柄の内部にハエの幼虫が入り込んで問題となります

新発生病害虫の詳細な情報は、北海道病害虫防除所のホームページでご確認ください

連絡先 Contact
中央農業試験場
病虫部 予察診断グループ
０１２３－８９－２００１
central-agri@hro.or.jp